



鼎談——新しい風が吹く、未来に開かれた空間へ

松枝 到

建築総合計画推進会議座長
表現学部教授



白石昌夫

和光大学学長



内藤 廣

建築家
新総合棟設計者

——今日は、新総合棟の設計をお願いしている内藤先生と白石学長、そして、この建物の学内検討委員会座長を務める松枝表現学部教授のお三方にお話をうかがいたいと思います。まず今回、本学としてはじめて設計プロポーザルをとりいれた意図、そして内藤先生を選ばれた理由をお聞かせください。



プロポーザル方式によって設計者が決定した2007年2月から約1年半。基本設計の最終プランが完成し、その概要が学内関係者に説明されました。

白石：創立から40年が過ぎた今、学内に新しい風を呼び込みたいと考えました。それが提案書をもとに設計者を選ぶプロポーザル方式を採用した理由です。

松枝：では、内藤先生のご提案を選んだ理由は、私から説明しましょう。はじめて私がここに来た30数年前、この地域は森があり小川が流れる空間でした。しかし、開発が進んだことで、かつての自然の姿が見えなくなってしまった。個人的には、そうした状況をずっと「いやだなあ」と思っていたわけです。

プロポーザルでは、いくつかの設計事務所からご提案をいただきましたがその大部分は、大学もしくは教育の場としてのシステムに沿ったプランでした。しかし内藤先生だけは違いました。学内だけでなく周辺一帯をよく歩かれ、そこから「古くからの多摩丘陵の形状を復元させたい」というご提案をなさり、それにふさわしいカタチとして、卵型を持ち出されたわけです。こうした一連の提案が決め手になったとい

うわけです。

——では、卵型の建物というユニークなご提案をされた内藤先生に、その意図やねらいといった部分をお聞きしたいと思います。

内藤：私自身、あまり講義を聞くことが得意ではなかったんです（笑）。どちらかというところから解放されたいと考える学生でした。当時の気持ちを思い出しながらキャンパスを歩くと、和光大学には、周囲の豊かな森など、あまり人が立ち入らないエリアが意外に多く存在することに気づきました。ところが、そのせつから多くの財産が使われていない。それは中心に一度集まり、そこから各教室に放射状に広がっていくという基本動線が関係しています。では、どうすればこの豊かな環境を生かせるのだろうか——。キャンパスの内外をぐるぐると歩き回ったのは、それを考えるためでした。

また私は、きれいな建物ができて、そこで過ごす人が窮屈な思いをするなら、建築のあり

学生たちはどう使いこなすのだろう

—松枝教授



方としては正しくないと思っています。そうではなく、新しい風が吹く、開かれた場所をつくりたい。それは、自分の未来が想像できるような場所といってもいいでしょう。新総合棟は、人を閉じ込めるのではなく、ここを基点に周囲に人が散らばっていくような場所にしたいと考えています。その結果、こういうカタチになったわけです。

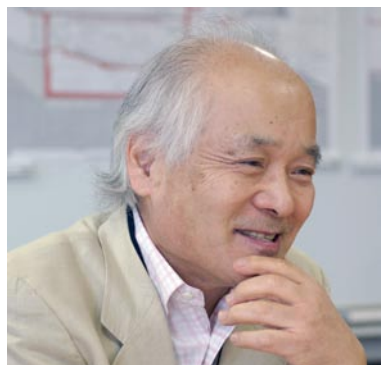
開かれた空間をめざして

—キャンパスを歩かれた際の学生たちの印象を教えてください。

内藤：のんびりしているというか、のびのびと大学生活をエンジョイしていることは伝わってきました。その自由さが和光大学の財産なのかな、と感じています。

白石：あまりのんびりするの考えものなんだけど（笑）。私たちは常に、学生がそれぞれの要望を自由に表せる場をつくっていきたくと思っています。そういう意味では、こういう自由な発想にもづく建物生まれることは、学生にとっても大きな刺激になるはずですよ。

松枝：たしかに和光は自由な大学といわれますよね。でも建築という観点で見ると、さきほど内藤先生が言われたように、実は中心が設定されているんですよね。とはいえ教員と学生の距離が近いためか、昼食を学食ではなく、研究室に集まるとるといように、学生たちは次第にいろいろな中心をつくりはじめる——今回のプランには複数の中心があります。この点は、きわめて和光的ですよ。



内藤：なるほど。

松枝：楕円なら中心は二つですが、設計図を見ると、それ以上の中心、あるいは出発点としての起伏がある。今後、学生たちがこれをどう使いこなすか。それが今の一番の関心なんです。

—ところで内藤先生は選定された後、まず松枝先生をお訪ねになりましたよね。その理由をお聞きしたいのですが。

内藤：エレベータで変わったおじさんと偶然乗り合わせました。松枝先生です（笑）。そのときから、ぜひこの人のお話をうかがいたいと思っていたんです。

松枝：かなりあからさまな話をしましたよ。どんな社会にもいい面と悪い面があるわけで、それを隠してもしかたありませんから。また、学内にはいろんな考えを持つ人がいるということもお話ししました。そして、その多民族国家のような姿こそが和光のおもしろさでは、と。

内藤：プランを考える上で、とても参考になるお話でした。いろんな方のご意見を取り入れていくと、民主主義ではありませんが、建物は収まるところに収まると同時に、特徴のないものになっていきます。しかし建築は常にそれを超えていかなければならないわけです。たとえば機能性だけで建物を捉えれば、それは5年も経たず古びていくはずですよ。そうではなく、ある種の精神性というべきものをいかに建物に反映させていくか——それこそが建築家が考える部分です。そのベースとなるお話がうかがえたと思います。

ともに建物を育てていきたい

—内藤先生のご提案には「サステナブル」という視点が、もうひとつのキーワードとして存在します。

内藤：これは時代の標語というべき言葉で、建

築界でもそれをいろいろな意味で使っています。そうしたなかで私は、エネルギー供給が逼迫しても基本的な機能を維持できる建物こそがサステナブルなんだ、と考えています。たとえば、新総合棟は可能な限り天井を高くし、窓も開閉できますが、それは仮に電力供給がストップしてもなんとかなるという意味合いもあるわけです。また、技術を過信しないことも大切なこと。極端なことをいえば、災害時に周辺に住む方々のお役に立てることも、私が使うサステナブルという言葉には含まれています。

松枝：新総合棟は構造としてとてもシンプルで、将来的には壁の位置を変えることも可能です。そういう点にも、サステナブルを感じますね。時代の変化に応じて、大学も変わっていくかなければならないわけですから。

ちょっと話は飛びますが、学生たちを見るとこんなことを思うんです。スタティックなもの、強固なものは壊れやすい。でも、柔らかいものは、どうにでもカタチが変えられる——。彼らは社会に出ると、いろんな方向に伸びていきます。でもその一方で、大部分が卒業して2年も経つと、研究室に戻ってくるんです。きっと大学には、そうやって伸びた部分をもとに戻し、本来の姿に還元させるという役割もあるのでしょう。伸びてはもとに戻り、また伸びて——。成長とはきっと、その繰り返しなんですよ。そういう意味では、卒業生が帰ってきたときにこの建物を見てどう感じるかも興味深い点です。

白石：人間はどうしようもない生き物ですが、でも、それを信じないことには仕事にならない。制作する上で、私はこのようなことを感じ

学内に新しい風を呼び込みたかったんです

—白石学長

ているのですが、お話をうかがうと内藤先生も同じような思いをお持ちのようですね。

内藤：ありがとうございます。

——ところで内藤先生は著書の中で、「形や空間を造ることではなく、人がそこで過ごす時間をつくるのが建築の本質なんだ」という意味のことをおっしゃっています。

内藤：たとえば中世は、みんなで建物を造り、みんなでそれを守り育てていくことが当たり前のこととしてありました。つくることと住むことに切れ目がなかったわけです。これは西欧も日本も同じです。しかし近代以降、業務という観点からそれが分断されていく。これは、あまり幸せなことではありません。やはり建物が完成した後も、使い手とともにそれを育てていくことが建築家の本来の姿だと思うんです。

松枝：とてもよく分かりますね。私の家は一応、注文建築なんです。建築家の方といろいろお話して、ようやく満足できる家ができたわけですが、でも住み始めると同時に、それは変化していくわけです。本棚に入りきらなくなった本が床に積み重なり、そこに猫がおしっこをかけてと（笑）。人が見れば劣化かもしれませんが、私にとりそれは家が自分のカタチへと変わっていくわけで進化なのだと思います。

もちろん大学の校舎は公共物であり、多くの使い手があります。でも、そこに大きな志が働けば、やはりそれにそって変わっていくはずですから、せっかくの新校舎を学生たちはす

ぐに汚してしまうだろうな、困ったものだ、と思う一方で、それこそが大切なんだと思う自分があるんですね。そうやってはじめて、生きた建物になるのかな、と。

白石：セーターも穴が開く直前が、一番着やすいですからね（笑）。

内藤：新総合棟の壁面はコンクリート打ちっぱなしにするつもりですが、私は安藤忠雄さんのようなきれいな打ちっぱなしはあまり好きではありません。新総合棟には、多少の落書きなどに負けない、存在感のあるコンクリートを打ちたいと思っています（笑）。

自然と建物との共生

——松枝先生は、内藤先生の作品である「牧野富太郎記念館」を訪ねたことがあるそうですが、その印象は？

松枝：イメージ文化学科ができた2000年から、毎年春に新入生全員とともに高知県を旅行していたのですが、その際、牧野富太郎記念館を訪ねていました。展示物もさることながら、高知市街を見下ろす高台に“くるりん”と妙なものが建っているというおもしろさに惹かれました。学科がなくなったため今は行っていませんが、5～6年は通ったと思いますよ。

内藤：私は、自分が手掛けた建物を見ると「ここが気になる」「あそこも気になる」と、あらばかりに目が行くタイプですが、不思議なこと

に牧野富太郎記念館だけは、見るたびに幸せな気持ちになれるんです。それは周囲に植物が育ち、行くたびに印象が変わることが関係しています。牧野富太郎さんが愛した五台山の土の力がわき上がり、自然の中へと建物が後退していくような——。それが私を幸せな気持ちにさせてくれるのでしょう。

松枝：学内の自然環境をどう回復していくかという点でも、牧野富太郎記念館は大いに参考になりますね。

白石：なるほど。ぼくはまだ拝見したことがありませんが、近々ぜひ行かせていただきます。

松枝：外に開いていくキャンパスを、というのが内藤先生の提案の骨子でしたが、これは地域に対して開かれていくという意味も含まれているはずですよ。

卵型の新総合棟は、地域のシンボルになるはずですよ。それだけに「ちょっと遠いけど、歩いて見に行きたいな」としてもらえる存在になってほしいですね。特に新コンベンションホールは、市民にも広く活用してもらえるものにしていきたいと思っています。



——内藤氏

私ならこんな校舎がいいな、発想の原点

Architect Profile

内藤 廣

1950年神奈川県横浜生まれ。1974年早稲田大学理工学部建築学科卒業、1976年同大学大学院修士課程修了。フェルナンド・イゲラス建築設計事務所（スペイン・マドリッド）、菊竹清訓建築設計事務所を経て、1981年に内藤廣建築設計事務所を設立。2001年東京大学大学院工学系研究科社会基盤学助教授、2003年から同大学大学院教授。2007年からは、グッドデザイン賞審査委員長も務める。主な建築作品は、海の博物館（三重県鳥羽市）、安曇野

ちひろ美術館（長野県北安曇郡）、牧野富太郎記念館（高知県高知市）、ちひろ美術館・東京（東京都練馬区）、みなとみらい線馬車道駅（神奈川県横浜市）、島根県芸術文化センター（島根県益田市）、とらや東京ミッドタウン店（東京都港区）、JR日向市駅（宮崎県日向市）など多分野に渡る。また近著には、2004年『建築的思考のゆくえ』王国社、2006年『建土築木1 構築物の風景』、『建土築木2 川のある風景』鹿島出版会などがある。



牧野富太郎記念館